

浮城子
風景圖
寫上

特別
13
3474
9

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 JAPAN

特



浮世

風呂

三編自序

齋尊聞

丹

首

風呂三編の流を古ふゝ病ま下し也。

浮世

風呂

乃滑稽也。今行もか後も。

も毫

とくづ

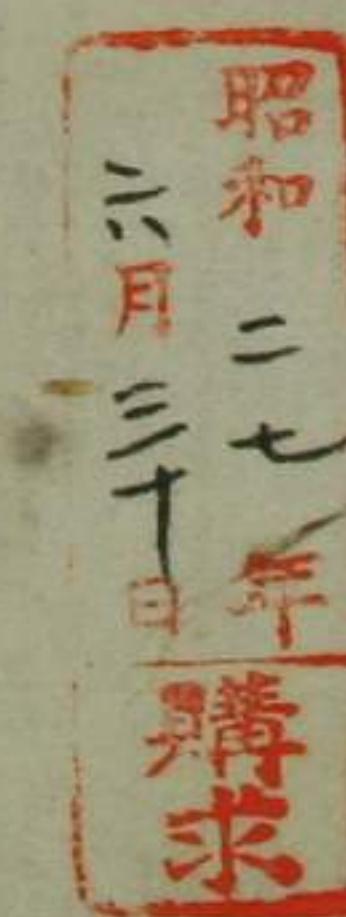
なく。吾嬬訛の案

東

西

訛りだけである。併て

も三編は人生より書林の欲心



増長へ需みの頻ひど。シット柔知の

幕湯小浴。頭向右馬め温泉いあむ。

三す周圍乃胸乃中。九足四方のみ

せり。筆おつねく。えすらまとも。エ夫

のをぐよ管をな。假令楊雄が方

言と聞記。半ニテヅ隱語と義

生れとも。諸國へても諸國の言語。

うのくじても。諺異づけづ便ち一

興れ端もあゆべ。江戸乃奶奶が

否紅元。まゆ。麻野郎。ほ。假寐なき悪

態。京の老爺乃鼻鳴。呼め。と。

あり。おまんまゆ。のふ。と。弱ま。

言をせらるるふ。大坂の仕夫。行ひ
とけり。も近き。古く。頃から。世の
う。で。風湯と。固辞。も。宿。と。氣
も。も。ちの。脅。懸。と。絞。り。と。難。代。衣。
四文と。御。ぐ。安。作者。十文の。匁。氣
かあ。づ。て。瘧。言。と。く。み。よ。う。

文化八年辛未乃夏四月本町
延壽丹葉店ふおひく

式亭三馬戲題



又 德亭三考書





學亭
三子

五

女
毒
湯
中

五

上八四

假字例

○申と内と訓與立と「あうアリ」音とちね類まで婦女子乃
讀易こと要とそれば音訓を不仮字使ひと止
○打を置なまく言ふ。もやあがなどから片言乃屬之俗傳
以撫て正雅俗乃異同ハ傍解ふ従ひく會得也

當申年新作中形よも本目次

芝客者評判記殘編三冊

人間万事虚誕計 一冊

三千世界樂臺探 初編 全三冊

忠臣藏偏癡氣論 全一冊

柳隱浮世風呂三編卷之上 新語

諱話浮世風呂三編卷之上

女中湯之遺漏

江戸戯作者式亭三馬戯編

春をあけばのましく白くなりゆくゆく粉ふるむにこの
顔がゆき初湯のまゆもわらわなねじきくる女湯が
ありまほづでそん揚とそ松の内早仕舞ちみれきくる椅子
のりとふたごどみ障子のむすよりかひまことなる。そのまほ
きじくもあり。又おのぎおせあざらひをあく。あまほくも
ひりきど。白き物のちう湯の三方とうひやる。ひのづけとせんもうぐう。ひの根蔓
の十二洞。男危へのあひきつゝ。えんがふうが高りして。室浦ぬ不盡と

急波山（くわさきやま）とあふぐ。そもそもあくめハ神代のゆきをまとやうアたりク。往來御
ひきつゝせる松檜はのぼる。林繁うるむ松真木りて。風雪極く男の煙火樓と
ゆりて。湯汲場（ゆくばばしや）の天岩戸とまことひくまとう。岸圍よりくる朝湯の湯きり。海
の風（かぜ）とちり。人くの面白やとしふくらむ。壁の大きさもまことに。そのもの人下めらるぬの
指の爪（つめのつめ）とあ道との物の跡（あと）。世ゆいふ新子白保子のたゞいとお。被大衣（ひだい）と
筋の世（よの）ありでくあらまざ。あそびの者れ推進ハ尋ねのるゆゑ。きどりて。思春すれ
べき癒者（ゆきしゃ）。

● 豊猫（とよねこ）とりふ十八九のがごとあり。がんぐふらぐらにの遙虛（とおき）を、コトト
ゆび二本でたゞの耳をひくむりあくまうて耳のつまをウタ
あくひうづら小こゑもく。かくごと下りのをゆく。
女房（めらわ）ふあよ。女郎虎（めらわとら）の嘘（うそ）へ惚（ほほ）まつた。藝者（げいしゃ）の虚（うそ）へ見（み）る。

● 帰間（きみ）の嘘（うそ）へ醉（酔）はゝと。茶屋（ぢやや）の嘘（うそ）へ連（つれ）ても、も早（はや）うあざり

はよヒツ。今一人ハ袖（そで）とゆサニのやう。わら。目と袖（そで）むすりてゆきゆき。アト
えんぎう風屋（ふうや）のほへ入る。うの名ハ婆文字（ばじゆじ）。

あ、婆文字さん。今朝ハ早（はや）うひとのう。婆文字さん。私
らよりもお酒（さけ）がゆうさうなりんぞ。さうするが船（ふな）のと。へばすれ
恨（うらみ）。ひひみとひみ。また此方の挨拶（あいさつ）も切れ船（ふな）うちふ（ふ）。フウ。
さううハイ豊猫（とよねこ）さん。明は（あは）ての結構（くわう）み春（はる）でござひまく。同上
お早（はや）くと移らましむかじけ。トキニ旧多（きゅうた）お仕事（しごと）ひいき。ワーフヤ
きざこのう。コウく婆文字さん。おりへふ達（たつ）まう。吐（ぬ）まうとどうて
かとくさぶ。ニア待まきなんす。ちよと温（ぬる）てやう。ます。

トざくらぐちをひらくうどあや

卷之三

トさうぐちへとひりかぶとあや
うぐら始終内と外とのかり今より
を出せり。おきに向ひ、じくふれど。きびて革中房の朝のあく。町鯨舎。料理家
の娘。ゆうひへ康徳など。おもてく入湯する。おもてをとど。あまきは
めりあかと。お向い。まちの字く。ねのゆご。あひの先一時日の晩の
おきと連う。
ヲヤ。先一時日と云ちやア。室う去季ごのう。去年とうと
えんご今。おれ。おもてく。大世日とえ日とおが。月と計て。おも
二編 女中房の女中房もばむれの
帰人ありとこ。ふもあほ。よし
者曰 帰人ありとこ。ふもあほ。よし
妻。まよ。まち。せ。料理家
の娘。ゆうひへ康徳など。おもてく入湯する。おもてをとど。あまきは
めりあかと。お向い。まちの字く。ねのゆご。あひの先一時日の晩の
おきと連う。

ま
とじひぢやア極くアきびざな。おめの出へりてどもくびら
かく。かくの用向く。まよかんの講紙。
アあたつてまうさうあくまう。うふよきのせ九日大雪

の隣と覽みの。うちちう者で上た浦づ。まきく
「物川」^{まつがわ}「^移玉た浦づ。いは役者のまきくをのう。
「まきくよ。大役者で浪花さんとひふ表徳き。その人の形が玉た
の善きゆ生写あご辻。婆の字が渾名を号すのよ」^ア
「あや」と呼びふをうら。桃林さとみて例のあご辻。いま
「ひくまもや。ゆゑいな。あくとくやれまい。」^ヨ「壁が壁が、いもを
きよみ。」^ミ「あれが」^チ「ラヤ正づ。」^ミ「めの上方視へ浪花さん
でさきうど。かわき悪くと復まんざる。」^キ「亦が駄馬喰の巻」^{タタタ}

さう。まよ「拳こぶしがまつり」ハシマキ。ヨヤ又アシタもと見ミル。
かんづんの用ヨウといふのヨウけ「されども。いと極ハシマツくまざうとも
口數カウジがえりて竟ハシマツもそくなるのハシマツる。もの。正月ハシマツへお敷ハシマツ
のあれと二日までふ仕ハシマツ井ハシマツ。五日ハシマツれ日ハシマツからあでぬ義ハシマツあ
ま。まらうと云ハシマツうきよ。其更ハシマツをよりへふ忘れどふさくハシマツて
寄ハシマツれ。大体ハシマツは遠ハシマツれど。約束ハシマツも大騒ハシマツらへぬくハシマツく待ハシマツ
きて居ハシマツと云ハシマツうきよ。其代ハシマツ恨ハシマツこのの極ハシマツくふ。おやへと
われと。你の字と。豊承ハシマツさんと。惠文ハシマツさんと。初ハシマツ立ハシマツ人ハシマツはとそ
りく。善ハシマツご。ハウ。嵌ハシマツ。いのう。初ハシマツぐじ。射ハシマツくらう。まじ。酒ハシマツが。もと。
のう。その代ハシマツ。まきがちくハシマツ。三味猿ハシマツの心ハシマツを。まくハシマツて。射ハシマツる。
猿ハシマツ。猿ハシマツさんへ。ひづ。太鼓ハシマツ幕ハシマツで。憲ハシマツけ。まふ。居ハシマツと。お方ハシマツの。ま
さ。まさくハシマツで。ひづ。て。居ハシマツる。うら妙ハシマツさ。まう。が。ど。灰ハシマツけの。もと。
人ハシマツ。まう。まきや。が。射ハシマツ。三。奉。同。ま。庭。の。松。ぢ。や。經。く。ま。一。あ。の
モウ。松。ぢ。と。唄。上方。者。ま。お。里。が。あ。や。る。ま。あ。れ。と。伊勢
あ。ん。ど。き。が。ま。あ。か。れ。音。頭。う。上方。者の。押。物。よ。シ。カ。シ。拳。が。強。い。の。う。自。慢。ま。る。ゆ
ふ。利。ぢ。や。ア。袖。ま。ご。う。他。の。拳。と。う。との。的。ま。ん。の。う。ヤ。拳。

ぢや。ありや益々ね。や奉。で奉度。わからうて對。か
き。れん。きそと三下ふえてか。りよ。や奉。で奉まく。
えの。みの。ひや。ぬや。と。やのまとなほのがや奉。さ。にて。七
九。と。ごの字。を。ねそらす。が。で奉。ごッサ。そん。う。け。といふ。の
らう。おちくや。おひくの。と。え。其連中。まどうち。猪兵清
さん。の拳。を。見る。でも。や。も。使。へ。ア大概。又。人。き。もの。組。さ
て。おひく。が。九。と。う。と。美。ひ。み。され。が。眞。の。拳。と。き。の。物。
一二三四五六七八九。と。し。よ。り。の。ご。ッサ。五。ご。の。七。ご。の。こ。う。
大。き。う。は。ゆ。く。さ。一。金。く。と。十。と。打。り。ん。ぢ。や。ア。筋。と。も。き。う。さ。入。が
教。ふ。き。う。こ。が。お。い。く。が。ゆ。う。み。る。を。お。奉。ま。き。あ。ぢ。や。ア。は。す。ま。く。筋。へ
の。う。一。二。三。四。五。六。七。八。九。と。打。の。ふ。き。う。の。す。り。ん。ど。ア。リ。や
古。風。さ。一。奉。と。り。と。う。一。ク。ん。と。以。ふ。と。悪。い。サ。奉。の。匂。の。外
ふ。五。六。七。と。常。の。教。で。い。ふ。の。く。か。き。う。筋。ま。う。さ。一。き。ん。の。道
も。利。屈。が。ある。の。う。回。倒。ら。ん。あ。方。く。ら。指。を。奉。て。数。が。高。
く。く。筋。で。能。さ。ま。う。み。ね。ご。ま。う。だ。ご。あ。ん。ま。う。負。る。と。後。が。立。
よ。も。客。で。も。構。筋。く。年。く。な。く。て。あ。え。一。お。ち。く。意。地。が

強居るうち。さうでも上手どへさんど。拳のる。悪くいふの。
ワクシ称へ浪花さんも奇羅の拳ぢやア祕へ声が早のよまへ
生」切で指先をもつぶすほどのう。「さむじくすと。秘のま
這へらうぢやア秘へ「秘サア這入らうト。さくら。あらへそらが
這入らう。もうジア生よう「コヤモレんまふごのまでも
のがせる。初まよへ「ひづるも智恵が秘へゆで。お妻の
ひ壽ぢやア秘へ。ようくやてもあれ能はぬ。」
風引扇そよぶ。初ゆごよ。まどく。傷つけられもあら。

「あいづアえ日か」と「遠のこりふみチトお衣装とねえいに
との子「長持七さと。草盲四さと。目移がとてなま秘
りゆ「せりやアさうと。彼小機ごとさうき「あれがわざ人男
似合よ「帶もりうちちうぢやと通りさへ。」ありやアよ
らう「ハイ山毛みた。出まとく。トロミガラザくうととて。」
まうと五日づの「ア 作者曰 はアといひ女のみ内くりちえ
又一日からみて遊び「そのからくじへ悪いのう。」
あく云ふまうれど癡ふるひう往へる。」とへみちや、三徳

さんざうよ^福に初^{もと}の立委の附^がうぎへらひへらす。
 反吐鯨舎^{ヘビゲルヤ}。う人のみと^もうるを云て癪^{アキ}ふたりことだら
 けき。それから居留^{カニマ}らゆへらうとさくらの桃林の内^{カミ}
 ひすみ。ナありやア。めいふ癖^{クモ}。氣^キふれぬも種^シへが。づか悪^{ヤハ}を持
 て居^リる人^{ヒト}。えまくさぶ。陰^カつき合^カてえりやア。今^カじやア。株
 どとどく下^セる。耳^{アツ}よ^リあへ^リてすんの。あの爺^{ジイ}は^ハ口計
 さ。あい^ア常^{アシ}不^レ宣^{アシ}算^スと^もうる人^{ヒト}をまざ^ガせて百^ハ
 か^ハの^ハ悪^{ヤハ}の酒落^セけ中^ハもあが^ハことの。てら^ハまア。百^ハの
 帶解^{アヒヨキ}。でも^ハうとうと^ハうひ^ハ年^ハ仕^ハて其^ハ眉毛^ハ何^のま^ハ。些
 との鏡^ハのま^ハが^ハも歴^ハる。其^ハ眉毛^ハ麻疹^ハ、二度^ハ善^ハ寺
 さほの^ハお^ハ間^ハ帳^ハやア。七度^ハも^リり^ハく^ハらうき^ハらう^ハか^ハの^ハ入
 キ^ハ白^ハ粉^ハを^ハ授^ハて^ハ。モ^リア。あ^ハて^ハわ^ハる^ハの^ハヤ^ハ。榜^ハ詩^ハぐ
 箇^ハ代^ハ建^ハ立^ハが^ハあ^ハま^ハる。と^ハざ^ハく^ハれ^ハん^ハ者^ハ、うん^ハぞ^ハと^ハ云^ハの^ハ
 通^ハ「あく^ハいの^ハこ^ハうちも^ハま^ハざ^ハふ。アイサ。どう^ハて^ハ波^ハ鯨^ハ舎^ハあ^ハま^ハり、
 や^ハさ^ハま^ハざ^ハら^ハ賀^ハの^ハ税^ハと^ハ緒^ハふ^ハ赤^ハ飯^ハを^ハ死^ハつ^ハう^ハと^ハ見^ハ期^ハふ。
 おまえも^ハい^ハざ^ハる^ハ世^ハ活^ハみ^ハ父^ハ爺^ハと^ハ云^ハう^ハ。父^ハの^ハつ^ハ種^ハる^ハ

サミ密^{きみ}が世活^せかき父爺^{ぢい}ふ鯨舍^{けいしゃ}百^{ひゃく}より彼女^{かれ}らや^らむかし
あつと^ときご道^{みち}に料^{りょう}理^り茶^{ぢや}も桃川^{とうがわ}ツサ^{ツサ}まのまわ^{まわ}こ^こ
ちやア^ア徒^徒「ほのめへりぐのう」ア^アあてまくとモウ^{モウ}出^で事^じ
まく^で下^へかト^ト入^るぬく^く人^{ひと}あり。これもおまじ友達^{ともだち}と^いそそ。ののうサヒ^ハ
お^あき^ある^か庵^{あん}と^とくえひ自^じ由^{ゆう}あ^はじ。ちふみをりもひきそ^そと^い
まう。を^おねこ^{ねこ}のあく人^{ひと}。さ^ははあて^て人^{ひと}。出^でく。黙^{だま}ふ^ふする^{する}ナ^ヤ
お^あき^うけ。さ^くら^うて^てか^かる^る。あ^くな^よモ^ウ。差^さて^たか^かる^る。船^{ふな}ま^ま
く。ち^りと^きも^もお^まん^せと^す。け^け中の^{中の}遺^ゆ趙^{しやう}逐^{おと}し^だよ^う。お^まん^ま
う^えし^しの^のき^きラヤ^ヤお^もろ^そう^う株^{かぶ}組^{くみ}お^もろ^そう^うね^ねト^トり^りを^を猫^{ねこ}
あ^まと^とう^うき^き。お^もろ^そう^うひ^ひく^くね^ね。又^{また}お^まく^くま^ま
な^なせ^せま^まと^とご^ご恨^{うら}み^み者^{ひと}。わ^れや^ど筋^{すじ}米^{まい}の^のふ^ふ。ま^まの^のま^ま。
且^よお^もね^ねが^が一^{いつ}日^ひあ^あい^いる^る。あ^あふ^ふ。其^{その}癖^{くせ}の^のか^かう^うち^ち
居^ゐく^くそれ^ぞの^の朝^{あさ}。からく^くま^まい^いと^と更^かう^うあ^あて^て床^{ゆか}て^て居^ゐく^く
あ^あと^と今^{いま}れ^れよ^よ出^です^す。位^いご^うう。是^ぜす^す。お^おね^ねお^おね^ね
と^と寝^ねふ^ふき^きが^がよ^よう^うと^との^の。惜^うい^いと^とた^た。お^おま^まは^はち^ちや^やあ^あま^ま
正^{まことに}ハ^ハ邪^あ魔^まふ^ふる^るの^のき^き。お^おま^まは^はち^ちや^やあ^あま^ま

可^う能^めさうふそりや御^ごよきのあらの酒孝^{さう}さんと雅文^{みやび}さんとすら
ちうが且^{だい}とおれることを二枚^{ふたまい}がは下^して落合^{おちあ}く。おひゆる年合^{ねんあ}
四^よ五^ご人^{じん}引連^{ひき}く押^おることひよりへどうら。大酒^{おほ}とあるてだり切^きく
だりむくれの方^な言^{こと}とだりと畧^あし。も^こふ^くとつも^と通用^う能^めきぬうり。宣^あう毘^ひ布^ふ鱈^{たら}ふ鱈^{たら}の端^は瀆^{づけ}といふお定^{きず}
でもゆるあへとうりつそ種^{たね}く取^{とり}寄せとあげ句^く。且^{だい}のおりひはきが
社^やかア種^{たね}へ去年^{きまわせ}の暮^{すゑ}か年忘^{おも}れがちくら。今日^{けふ}へめでまく
年^{とし}をせう。が又^{また}社^や教^うの掲^{かか}ふるも種^{たね}へ。ほでもよくある
一番^{いちばん}完^{まつ}趣^き向^{むか}へ。種^{たね}細^{ほそ}ニの料理^{りょうり}をせうと云^いふきと

うみて^{うみて}ゆく尔^そおほ度^どうひて案^{あん}じて身^みにあがモ^もく様^{さま}を
たま^{たま}と終^すのよ^よりやど^どのう^うば^ばりも^も多^{多く}飛^とび^と雅文^{みやび}さん^が新^し
煙盒^{えんべつ}を提^{さげ}て出^でこら。トコ^{トコ}と^と火^ひの^の火^ひの^の中^{なか}へひひ^ひと海^{うみ}を
あ^あ波^{なみ}ア^アくして櫻^{さくら}花^{はな}と^とせそ。中^{なか}ふちよんびりと火^ひの^のり^りと^とあ
形^{かたち}が^が鷹^{たか}の壳^の赤^{あか}いふ^{いふ}。傍^{そば}の灰吹^{はいぶき}の中^{なか}が雲丹^{うんたん}「引^ひき^き」
ま^まう酒孝^{さう}さん^が買立^{めうり}の耳盥^{みみはせ}の中^{なか}へえは一^い夏^{なつ}ふ海^{うみ}を^を
どうく交^かうの^のき^き「ラヤ^{ラヤ}」^{ラヤ}種^{たね}^{たね}ギ^ギア^ア小^こ商^{あき}物^{もの}店^店よ^よを^を
の^のう^うさう^{さう}ざう^{ざう}よ^よい^いぎ^ぎの^のう^う。聽^きても獨^{ひとり}ごろ^{ごろ}いよ^いさう^{さう}る^る

且^があまじいわはあると、さうとおで出て、櫻^{さくら}は臺^{だい}を擧^たげ
傍^{わき}金^{かな}と。其中^{うち}が汁^{じる}沢^{さわ}山^{さん}の雞卵^{けいらん}のゆふくさ「そいゆ」
のう。行^ゆ後^ごでは合^あなせそんは悪^{くろ}い酒^{しゅ}蔵^{くら}をほぐめにあんざう
瞬^{また}ぐあくまがけ、まるひみ。器^{うつわ}はぎれ新^{あら}ひいろ。奉^{まつ}畢^{めい}な
み^み百^{ひゃく}も巣^{すず}知^して居^ゐて、どうも食^くふべ^く。其^{その}付^{はり}は九^く六^{ろく}蟲^{むし}のう
ての流^{りゆう}石^{いし}不^ふ名^{めい}位^位も不^ふ可^かも^う。冷^さちやア^は室^{むろ}、室^{むろ}か止^と
去^くて真^{まこと}の料^{りょう}理^り小^こうと^とか^かアリ。あらへもしも室^{むろ}あ^あづ^づ
ア「室^{むろ}」遍^{へん}けき合^あて這^は入^る。あよも^よもき^きを
のう。背^{せき}を^をかを^とうと^う人^{ひと}も、わざわざ^{わざわざ}あがきの^{あがき}をゆけ^{ゆけ}、あうえん
が^がくそりで^であがう。あく^{あく}いふ^{いふ}てあがう^{あがう}きの^きを^をか^かうて、あうえん
お辭^さふ^ふあまくま^まよ渡^{わた}かせ^せよ^よア^アイヨト^トゆ^ゆを^をか^かうて、お^おト^トは^はと
を^をき^きう^う「久^くかゆう^{ゆう}のあゆ^ゆを^をゆく^くの^の」^の松^{まつ}家^やの^の一^一代^{だい}
家^やと初^{はじ}み^みあ^あくらう^う「は番^{ばん}降^おさん^{さん}へ色^{いろ}を^をみ^みよ^よ。何^{なん}ぞ^ぞる
よ^よき^き「それ以^い後^ごま^まの大^お世^よの書^か牛^{うし}エ^エヒト^{ヒト}ま^まの^のま^まづ^づき
足^{あし}どりの^のぶ^ぶき^きらへ^へま^まの^のキ^キ「^の移^いへ^へホシ^{ホシ}に^に頃^頃^ごく^くの^の道^道^{みち}跨^かさん^{さん}う^うか^かじ^じて
あ^あえ^えま^まん^ん移^いへ^へ。めの^{めの}や^や病^病^びま^まい^いみ^み。おり^{おり}へ^へ春^春^{はる}ふ^ふ行^は
て^てま^まう^う「ヤ^ヤ」^くそりや^やア^アらふ^ふ。道理^{ぢの}を^をし^しく^くあ^あく^くえ^えま^まり^り。

私アリが又赤ミタツあひスル恋ハシキ幸復ハシキ。ハイキモチからアライトカク

作者曰

とののこう十ナナをううの小娘コノシロあやかねとハセ。お角ツブさんげのひざハサカ、
モテタマタマタマのと思マダラもあマダ公ハシマけぞ。

お警ハサカ石シモツがお体タタキでよハシマ。おまハシマもうへハシマも。お警ハサカ石シモツの

お休ハシマが何ハシマともハシマ。室ムロうハシマとハシマ。一ハシマだハシマよ。まハシマよ。お正月ハシマ

の手ハシマのがまハシマとハシマよ。アホ正ハシマ。お正月ハシマも松マツがえれど不ハシマ意ハシマきハシマ。便ハシマりとハシマまでも松マツとハシマいはめハシマがよハシマのよ。内ハシマの
内ハシマでも壁ハシマぬハシマ。兩ツの福ハシマ人ハシマ。否ハシマうちハシマやハシマまよハシマ。アハシマま入ハシマれ。お正月ハシマ

がよハシマのう子ハシマ。ゆハシマのうも離ハシマさみハシマよハシマうハシマ。アハシマごち

うハシマおハシマひハシマる。アハシマもすハシマもおハシマひハシマうハシマ。アハシマも方ハシマよハシマ。それハシマも

角ハシマえんハシマく。角ハシマもなハシマく。越ハシマと羽根ハシマ。角ハシマくらうハシマうハシマいハシマ。越ハシマと

羽根ハシマでハシマく。角ハシマもよハシマがわ。羽根ハシマは天ハシマまハシマが悪ハシマいとハシマつれ

後ハシマから鍵ハシマの方ハシマがよハシマらうハシマ。アハシマ天ハシマまハシマが悪ハシマくハシマてもハシマ。私アリ

おハシマのあハシマでハシマく。ううよハシマ。おハシマの。高ハシマアハシマく家根ハシマ。根ハシマ

てあるうちハシマ。こハシマの下ハシマへ舞ハシマへまいりハシマのとハシマ。しハシマひハシマよハシマふとハシマまハシマら
これハシマ後ハシマか。舞ハシマのね。伯母ハシマさんハシマの。下ハシマうハシマ。お年玉ハシマ。おまハシマよ

下
立たてくがどと種たねそれへ枝えだ越こえへり。へ葉はの上うえでよくもづよ
角つのもま人の宿とねまんハ能のぞ宿とね母めまんぶ。そとても使つかひのむうきとも
氣きがよいからよんぐ林はやし。ここのおうちまんはまろいよ。むせうと
お叱のりどよ。まアお聴きる朝あさもくつ起あるとまちのお師じさんへ
てお音おとを出だす事こと。まちらと味み線せんのむ脇わきえの下したを誓ちかうす
ほのうそ。因いのへゆそ朝あさ飯めしばとて踊はなの誓ちかうす。おもむ突つ
突つ。おハツふや。そく湯ゆりくある。そとお琴ことの小師こじ道みち
えんへりそまくらぬそニ味み線せんや踊はなのあまくじさト。臂へ筋きと
スラくとひきがうづけてまちと。其内うちふちイツとばかりのまへでれ。聞き
れまち小僧こそうの囁ささくせう。其内うちふちイツとばかりのまへでれ。聞き
る事こと又琴ことのまくらひき。まだまくらひき。まくらひき。遊はまふ薄うすいから。
香かりでくすくなれり。同じのもくまん。ひりそ可い能いべくまくまくが
よのから。おづまんがまくらと。むかひごと。ゆのそんまゆはく
ひゆゆへき。あれがまくらくて。軒あても。どうや。初はじやう見るうら
打うまうお。ごやうううで。まくらの響ひびきくら。些すこと計けいそまくら
触ふとむかひごとれども。お望のぞえとまくら。手てふ響ひびきくら。位くわ
きこす。おふ漂うきて。まくら。や。役えふまくせん。女の子めのこの私わたしのうう

だらもまたさんも掠ひきまつる。わが大きくなつことを
とうひとせらひにまと。ほくさんがそなへりとあーすあ
から。あれかとこに馬鹿もーと。いきはせんうへのかの
とおひひよせーてね。あくさんへ幼い筋うちむとゆくでね。
家へうちも、お知りないひよ。あのよ。山どみ。海どみとあつての
とくやう。うまれ。あくさん。うあ。ちく。とくう
遠の方でも、彦ごら。お三絃や角用もお知りないのさ。ま
からせてもあれや。龜を仕掛けぢやアさつませんと。おつかさん
一人で、ちやくぢても生ぎよ。ア。あくに。さんふく。つちの
あつまんぬでも、おきても生きら。ちとぞり三絃の潭ねが遠くと
立ふお化りよ。このもくさんへ七の紫雲ふ踊て。舞
あ上りよ。そなぐと。地赤の地白の地黒の紫雲端締の
裾模様。お模様の太振袖。サトアモ天鷲の絨
のや。石ふ枝のや。角をも長ね小入。たんと持てもうりだ
なれど。このあとまんがどううだ。す。おもせざと。ア。
お婆さん。がくと。お婆さん。お婆さん。がくと。ア。
お婆さん。がくと。お婆さん。お婆さん。がくと。ア。

かす誓ちんさんでもさう苦ざむ。婆さんのおひひよ。お丸
を病身びゆんじん。どうりまると三絃さんげんけで対たいの声こゑをせし。人ひとが結むす其
代だいふふかを縫物ぬいものとよく是これをせるがからんごとけ間まの繙ひらねを
いきよ。もまもまももははくくりりててににつけつけるもる人形にんぎやの衣
とと一いっ纏まつた。アイ。アレアレくも角くわくさんさんくくトトみへらへらせせく中なか
ココななががア。めめどどままんん一いっすすももえ。ふふぐぐ二に人ひと方かたああだだ活はき
縮縮ちぢれの裁きをかかそそとと。やうん玉たま。若いこい作つとと。わ。あの
ととぐぐりり着きる。結むす居ゐ。おままんんの頭かぶを立たててま

